
ハピネスッ ~ヲタクな君に、恋してる！~

月千一夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハピネスツ～ヲタクな君に、恋してる～

【Zコード】

N61711Y

【作者名】

月千一夜

【あらすじ】

何処にでもある

誰もが見たことのある様な

ありふれた、恋の物語です

ただ、人生で初めての恋をした少年が

ヲタクな彼女と一緒に

ただ毎日を過ごしていく

そんな物語

以前にモバで投稿していたモノを、リメイクした作品です
どうか、お暇な時間にでも読んでやってくださいな

第1話 春、それは特別な季節（前書き）

第1話、投稿です
物語の、はじまりはじまり

第1話 春、それは特別な季節

春

出会いと、別れの季節

この頃には入学式があつたり、卒業式があつたり
お花見とか、特別な楽しみ方があつたりで
皆が皆、さつと何かしら、この季節に対し特別な想いを抱いている
ことなんて

想像には容易い

それはきっと、樂しかったことや

時には、悲しい思い出だつてあるのかもしれない

だけど、まあ・・・そんな特別な季節な春なのだが
非常に残念なことに

真に遺憾ながら

いやまあ、俺はそんな風にすら思っていないのだが
とにかく・・・ぶつけやけて、言ってしまえば

――俺は今まで、そのように“春”に対して、何も特別な感情など抱いたことがなかつたのだ

悲しいことも
楽しいことも
皆が言つよつたな、体験したような
そのよつたな、特別なイベントなど、一切なかつたのである
それが悲しいとは、思いもしなかつたし

少し、“物足りない”と思つた程度だつた

確かに、俺自身、何かあればいいなあとはおもつてゐるのだが
いざ何も起きなかつたとしても、“まあ、こんなもんだよな、現実
つて”とか

無駄に達観したように、吐き出すだけだつた

だからこそ、俺は“期待していなかつた”

“春”

今年から、めでたく“高校生”となる俺は
この季節に対し、なんのトキメキも感じていなかつたし、一切の
期待はしていなかつたのだ

“春”なんて、所詮は四つある季節のうちの一つ
それ以外でも、以下でもない

過ぎ去つていく景色と、なんら変わりはしない
気付いたら、終わつてる

そんな季節

だから、だからこそ

――俺は、戸惑つていたのだ

もう一度、言おうと思つ

大切なことだから

言つておこうと思つ

俺は・・・この季節に対し、一切期待なんてしていなかつた

だからこれは、誤算は誤算でも

“どう表現したらいいのか、わからない誤算だつた”
今まで感じたことのないような

いや、事実感じたことのない感覚で、胸がいっぱいになつていくの

だから

戸惑うな、といつのが無理な話である

さて、そろそろこれを聞いてくれている人も、我慢の限界だらうと思つ

無理もない

朝、或いは夜だらうか

どちらにしても、多分空いた時間を使い、聞いてくれているのだろうし

そろそろ、本題に入らうと思う

本題、といつよりは、俺がいつたい何を言いたいのか

といつ、ことなのだが

まあ、一言いてしまえば簡単なことなのだ

誰だつて、すぐに理解できる

単純明快

そんなお話

それは、ある晴れた昼休みのこと

通つている高校の中庭

其処の名物となつてゐる、大きな大きな一本の木の麓

そこで俺は、一人の“少女”と出会つた

近づいてきた俺に気付くことなく

眼鏡をかけたまま、未だ眠り続ける少女の髪は、黒く美しい長髪で

鼻のあたりのソバカスも、何ていうか“チャーミング”で

その寝顔は、まるで“天使”的だったのだ

「ん・・・」

――それで、ここまで言えば、もう理解できたと思う

春

三度目になるが、俺はこの季節に対し一切の期待をしていなかつた
そんな中、俺は出会つてしまつたのだ

一人の少女と

美しい天使と

ああ、もう言つてしまおう

ぶつちやけてしまおう

でないと、早くなつた心臓が、爆発してしまつそうだ

そうだ

この、期待なんてしていない、いつもと同じだと思つていたはずの
季節が

“特別な季節”になつてしまつたのだ

高校生になつて、大体一週間が経過した頃

“春”

俺・・・“篠崎灰斗”^{シノザキカイト}は、これまた人生で初めての、“恋”をして
しまつたのだ

ハピネスツ～ラタクな君に、恋してる～

第1話 春、それは特別な季節

――――――

私立凌徳高等学校

最近創立されたばかりの、市内では、いや市内どころか県内では最も新しい高校だ

その広大な敷地と、充実したカリキュラムによって、多くの学生が集う有名校にして、“ハイレベルな進学校”だ
その割に入学試験の敷居はそこまで高くもなく、入学後に自身の道筋を決めるといった感じだ

そういうえば、意外と言えば髪型のことだろうか

こういう高校などは、大抵の場合は校則などで髪型などが定められているものだが、ここは違った

髪型や髪の色に関しては、一切の自由が認められているのである
意外だと思ったし、正直そこはホッとしている

俺は生まれつき茶色い髪だったし、今さら染めろなんて言われても、
正直面倒だったから

助かつたと、素直に安堵したのも良い思い出である
まあ、たった1週間ほど前のことなのだが

それは、さておき

1週間も経てば、もう新入生たちも徐々に、新しい学校生活に慣れ始めている頃だ

部活に入つたり、新しく出来た友達と一緒に遊んだり
それなりに、学校生活を満喫している頃だらう

―― もっとも

それに關しては、“例外”だってもちろんいるわけで

そんな例外に関しては、“俺”だつて他人事ではないわけ

「はあ・・・」

なんて、辛氣臭い溜息を一つ吐き出し
俺・・・“篠崎灰斗”もまた、この過ぎていく日々に馴染めずに
折角の昼休みを、一人で過ごしているのである

“何故？”と聞かれれば、恐らくは俺自身の性格にあるのだろうが
あまり積極的に他人と話すようなことをするわけでもなければ、率
先して委員長などに立候補するような性格でもなく
話しかけられない限り、こっちから話すようなことは、あまりない
からだ

もつとも、だからといって、友達が一人もいないわけではないのだ
が・・・

「よ～、灰斗
どうしたんだよ、そんな溜め息なんかついてさ」

「あ～・・・別に、なんでもない」

噂をすれば、といつやつだらうか

丁度、絶妙なタイミングで話しかけてきたこの男
金色のツンツンした髪型の、いかにも“高校生活エンジョイしてま
す”つてテンションなこの男

名前を、 “氷室瑠輝” という

ヒムロルキ

瑠輝なんて、随分と洒落た名前だが、案外良い奴で

そこいら辺は、腐れ縁というのだろうか・・・幼稚園の頃からの付き合いである俺が、恐らくは一番わかつているだろう。性格は天真爛漫というか、とにかく明るく、誰とでもすぐに仲良くなれる

俺からしたら、とても羨ましい性格の男だった

噂では早くもファンクラブなんかも出来ていてるらしく、コイツが主人公だったほうが良かつたんじゃないのかと、本気で思う程にコイツは、間違いなく“良い奴”だった

だが、残念ながら、この物語の主人公は俺しかいないわけで申し訳ないが、こんな冴えない俺の物語を、皆様には聞いてもらおうしか出来ないので

いや、マジでゴメンナサイ

まあ、紹介はもういいだろ？

そろそろ話を進めないことには、皆様も退屈してしまっただろうし

10

「ていうか、いつたい何の用だよ？
なんか、用事でもあつたのか？」

「冷たいなあ～、親友だろ？

お前がなんか寂しそうにしてたから、親友としては放つておけない
じゃんかよ」

「あ～、はいはい

どうせ俺には、友達はお前しかいませんよ
しかも、お前と違つて女子にモテルわけでもないしな

と、軽く皮肉つて返す俺

瑠輝はとこうと、そんな俺に対しても何故か、“溜め息”

「おじおじ・・・前半は、まあスルーするとして後半部分、本氣で言つてんのか?」

「なんだよ?

その通りだろ?」

「あ〜・・・うん、まあいいや

お前は、“いつもやんな感じ”だもんな

“いの、女泣かせめ”と、また溜め息

なんだよ、ソレ

俺の顔を見るだけで、女子は嫌すぎて泣いてしまうつでもこいつのか?

それは、流石に酷過ぎやしませんかね?

「ま、友達なんて、そう意識して作る様なもんでもないさ
まだ学校生活は始まって、たったの1週間だろ?
高校生活は、まだまだこれからさ」

「なら、いこいんだけどさ・・・

と、今度は俺が溜め息を吐き出す
それから、俺は席から立ち上がる

「何処に行くんだよ?」

「購買

今日は、弁当作ってくんの忘れたんだよ

そんで折角だから、中庭の景色でも楽しみながら休みを過いちゃう

それだけ言って、俺は教室から出て
真っ直ぐと、購買へと向かったのだった

「よかつた・・・焼きそばパンが残つてて」

等と、安堵の溜め息と共に呟きながら、俺は緑溢れる中庭を歩いていた

その片手に、戦利品である焼きそばパンを持ちながらである

この学校は全てにおいてハイレベル、なんてよく言つたものだと思つ
俺の持つこの焼きそばパン一つにしても、かなりの美味だという

その噂は、毎回購買のモノがすぐ売り切れてしまうことが、なによ
り証明しているだろう

かくいう俺も、今から食べるのが楽しみだ

「せつて、あとは・・・食つ場所か

言つて見渡すのは、この学校の自慢であり名所でもある、中庭である
気合の入りまくった、この美しい中庭の中
何処で食べようか、等と考えていたのだ

と、いつてもだ

「もう大体の目処はついてるんだけどな・・・」

言いながら、俺が見つめるのは、この中庭の中で圧倒的な存在感を放つ場所だった

この中庭の、ちょうど中心にあたる場所
其処に見えるのは、大きな・・・というよりも、“巨大な”
圧倒的な存在感を放つ、一本の“大樹”だった

学園名物の一つ・・・“凌徳大樹”

「ホント、勿体ないくらいにそのまんまの名前だよなあ」

こんな、立派な大樹なのにな
どうせなら、“世界樹”とか、そんな名前でも良かつたんじゃないのか？

なんて、馬鹿なことを、本気で考えてしまうくらいに
この木は、本当にデカくて、圧倒されてしまうのである
そんな木のことが、俺は前から気になっていたわけで
今日、満を持して間近で見ようと思ったわけだ

「焼きそばパン片手についてのも、なんか気が引けるけど・・・」

まあ、仕方ないか

実は結構、シャイな俺のことだ

情けない話だが、ただ“樹を見たいから”という理由だけでは、俺

はそつ気軽に動けないのである
いや、なんか本当に情けないんだけどさ

「ま、昔からだし

今さら、そんなこと思つても無駄だよな」

――さておき

目的の場所は、もう其処まで迫つてきていた
遠目から見ても相当デカかつたけど、近くからみればまた、一ひら、
なんていうか迫力があるな
一言でいえば、そう・・・

「す、ぐ・・・大きいです」

こんな感じだ

うん、まさにこの一言に尽くるな
・・・おい、何だか今、ガチでムチな想像をしなかつたか?
言つとくけどこれ、そんな話じゃねーから!
いや、マジで勘弁してくれ
ともかく、せつかく飯を食つゝて理由をつけて、勇気を振り絞つて
ここまできたんだ
わざわざ、目的を果たすとしよう

「ん・・・?」

ふと、徐々に大樹へと近づいていく、俺の視界の中

丁度、大樹の根元あたりだろうか
微かに、人影のようなものが見えたのだ

「あつちや～、先客かな？」

と、俺は頭を搔く

よく考えてみれば、いや、よく考えなくつたってわかる話だ

此処は、この学校の名所のひとつなのだ

この木の下で昼食を食べようなんてこと、他に考える人だつている
だろう

特に、女子つてこういうところで食べるの好きなイメージがあるよな
いや、あんま話したこととかないし、殆ど想像の中での話なんだけ
どさ

「まあ、いっか」

ひとまず、近づいて様子を見てから考え方
といつても、まさか“ご一緒にしてもよろしいでしょうか？”なんて
言つ度胸はないんだけどさ

等と考えながら、俺は徐々に大樹へと近づいていく
それと合わせ、視界にうつる大樹もさらにおおきくなり
先ほどの人影も、よりハッキリと見えてくる
——そして、溜め息

「ああ～、よりにもよつて“女子”かあ」

見えてきたのは、とても長く黒い髪

自分は女子だと主張する、その学校指定のスカート

うん、女子だ

いや、むしろこれで男だったら、とんでもない大問題なんだが
校内で女装とか、ないないない

そう思いながら、俺は近づいていく

そんな中・・・

「・・・え」

何故だらうか

――足が、“止まつたのだ”

それは唐突に、突然に、なんの前触れもなく
起こつた・・・“異常”

「あ、れ・・・？」

おかしい

明らかに、おかしい

もう、大樹までは、目と鼻の先の距離なのに
いきなり、足が止まつてしまつたのだ
同時に・・・早くなる、“心臓の鼓動”

「なんだよ・・・コレ？」

自身の身に降りかかった、原因不明の症状に俺は
唯々、その場で戸惑うばかりだった

いや・・・違う

確かに、何が起こったかなんて、俺には全くわからなかつた
けど、それでも
こうなつたであろう原因に

――俺は、気付いていた

「“「イツ”、か・・・？」

ああ、そうだ

俺の足が、動かなくなつたのも
心臓の鼓動が、早くなつたのも
胸が、わけもわからずに苦しくなつたのも
全部、これが原因・・・

「ん・・・」

俺の目の前

この、大樹に寄りかかり眠る・・・この、一人の少女
彼女を見た瞬間から、彼女を認識した瞬間から

俺の中で――何がが、“弾けたんだ”

「なんだよ・・・」

眩き、俺は震える手を握り締める

その瞬間、焼きそばパンがとんでもないことになっていたが
そんなの、気にもならないくらいに

俺は、冷静じやいられなかつた

「なんだよ・・・“これ”？」

“これ”とは、この意味不明、理解不能な、この現在の状態のこと
この、どうしようもないへりへり、胸が苦しくなってしまつ
そんな、今の俺のこと

「あ・・・」

そんな中、俺はふと思い出す

それは、自分の部屋の中

今まで自分が体験したことがない、いつか体験してみたいと思い集
めていた

何冊もの、本のこと

その本とせ・・・“恋愛マンガ”である

「おこおこ・・・井上か、これって

よひめり、額に手をあてる

熱い

熱を出したわけでもないのに、とても熱い
いや、そもそも額に当たる手も、それどころか体全部が・・・とこ
かく、熱い

ああ、そうだ

俺は、こういう“症状”に、心当たりがあった

曰ぐーーー体が熱くなったりする

曰ぐーーー胸が苦しくなったり、鼓動が早くなったりする

それは、俺がまだ体験したことのない

本の中でしか見たことがない

“未知の体験”

その、名前は・・・

「これが・・・恋、なのか?」

“恋”

咳き、俺はもう一度、彼女のことを見つめた

未だ眠つたままの彼女は、安らかな寝顔を浮かべている
美しく黒い髪に、眠つてしまつた際にズレタのであろう眼鏡も
鼻の周りに微かに見えるソバカスも

全てが・・・俺を、“ドキドキ”させた

“恋”

篠崎灰斗、十七歳

彼女いない歴、同じく十七年

そんな俺は、ある日出会いてしまったのだ

学園名物である大樹

其処で眠る

一人の・・・“天使”と

その日・・・俺にとって、初めて春という季節が、特別なものへと
変わったのだった

↓ 続く

第1話 春、それは特別な季節（後書き）

さて、いかがだったでしょうか？

うん、このお話だけじゃ、何が何だかわからないよねw

次回は、なるだけ早く投稿します

それでは、またお会いしましょう

第2話 めずら、声をかたむといひかり（前編）

いつも、月千一夜です

第一話、公開します

今回もまた、彼女はあんまり出でません
悶々とする、勇気を振り絞る
そんな少年の、お話です

第2話 まずは、声をかけるところから

「ソイツは多分・・・“瀬川アズハ”のことじゃないかなあ」

――“瀬川アズハ”

浅瀬の“瀬”に、三の字の方の“川”
名前の“アズハ”はカタカナで書くらしい
身長は150センチ弱
長い黒髪に、赤渕の眼鏡
性格は、一言でいえば“暗い”

というのも入学して一週間が経つ現在、彼女はまだ友達がないらしい

俺と違い、幼馴染などもいないみたいだ
故に、彼女はいつもクラスでは一人なのだ
因みに彼女のクラスは“一年三組”
俺が二組なので、教室はすぐ隣ということになる
それを知った瞬間、心中でグッとガツッポーズしたのは
まあ、内緒にしておこう

さて、そんな彼女
瀬川アズハについて

何故彼女のこと、俺の友人にして親友が、こんなに知っているのか？

それは、彼女を語るうえで欠かせない、“ある事情”に起因するらしいのだが

それ故に、彼女には未だ友人と呼べる人がいないらしいのだが

それについて、アイツは教えてはくれなかつた
なんでも、“人から聞くよりも、自分で直接話かけ、知つたほうが
いいだろ?!”のこと

無茶を言つものである

そう易々と、人に話しかけられるものならば、もうとっくにお前以外の友人だつて出来てゐる
そのうえ、まさかいきなり初恋の女子に声をかけると言つのだ
死ねる

ハズか死ねる(え?)

しかし

しかし、である

俺だつて、“男”なんだ

こついう時に勇気を出さないで、何時出すつていうんだよ
そうだよ

そもそも、唯話しかけるだけじゃないか
こつ、もつと氣楽にいこう

“おはよ?”とか、“はじめまして”とか

そういう、当たり障りのない会話から始めればいいじゃないか

などと、考えながら

俺が、彼女と出会つた翌日のこと

時間で言えば、昼休み

俺は、彼女のクラス、もつと言つてしまえば、彼女の机のすぐ前に立つていた

集まる、そのクラス中の視線

無論、彼女も“何事ですか?”と、驚いたような表情を浮かべ、此方を見ている

そんな彼女の視線に、本気でドキドキしながら

俺は、授業時間さえも潰して、考え続けていた一言

“瀬川さん・・・ちよつと、いいかな？”

――と、テングプレ的、かつ当たり障りのない言葉を発すべく

スタンバッテいた

俺は、いよいよ

彼女との、初の“対話”を試みるのだ

といづか

その、はずだつたのだが・・・

「おじアンタ、瀬川だっけか・・・ちよつと、ツラ貸せよ」

「ひつ・・・!？」

・・・いへりなんでも、これは違う気がするんだ

瀬川、泣きそうじょんか
てこうか、泣いてるじょんか

けど、ごめん瀬川

――泣き顔も、滅茶苦茶可愛いです(^ ^)

ハピネスツ～ラタクな君に、恋してゐるー

第2話 まずは、声をかけるところから

――――――――――

さて、そもそもお話

何故、先ほどのような状況になってしまったのか

まずは、その辺りのことから話さなければならないだらう

それは、俺が彼女と

その頃はまだ名前を知らない“天使”と出会つてから、一日たつた

翌日

朝のH.Rの、少し前のことだった

「俺・・・恋を、したみたいなんだ」

「・・・は？」

朝一番、教室の中での、俺の一言

それに対し瑠輝は“”と、口をポツカリとあけたまま信じられないといった表情を浮かべていた

そんな友人にして親友であるコイツの態度もよそに、俺は机に頬をつけたまま思い出す

昨日の昼休みに出会った、あの美しい天使のことを

「い、いやいやいや

朝一でいきなり、ナーブつ飛んだ」と言ってんだよ灰斗
おまつ、おちおち落ち着けって」

「いや、お前が落ち着けよ」

なんだよ、いきなり

普段のコイツらしくない

いつもはもつと、飘々としているのに

「いや、つーか落ち着けって方が無理だろ！？

あの、お前が恋いいいい！？」

「ばつ、声がデカいんだよ、声が！？」

慌てて瑠輝を止めるも、時すでに遅し

クラスの視線が、もう凄まじい勢いで集まっていた

小さく“え、篠崎君って好きな人いたの？”とか“嘘・・・”など、何故か妙にガツカリしたような、そんな声が聞こえてくる
そんな視線に必死に耐えながら、俺は瑠輝に顔を近づける

「頼むから、静かにしてくれ
オーケー？」

「オーケーわかつた
わかつたから、その眉間にグリグリと捻じ込んでる手を離してくれ
かなり、痛いんだ」

言われ、俺は手を離す

すると瑠輝は、安堵したように溜め息を吐き出す

それから、俺のことを見つめたまま苦笑を浮かべるのだった

「しつかし、マジか？

お前が、恋つて・・・」

「憑じいけど、マジだよ」

「つははは・・・そつか

それはまあ、なんていうか

幼馴染としては、素直に嬉しくはあるな

笑い、瑠輝は再び顔を近づけてくる

それから、“そんで”と小さく呟いた

「いつたい、誰が好きなんだよ？」

「いや、それが・・・名前、聞けなかつたんだよな」

俺はそう言つと、深く溜め息を吐き出した
といつのも昨日

彼女を見つけた後のことなのだが
その寝顔が、あまりに綺麗で、あまりに輝いて見えて
俺は、彼女を起こすこともなく
其の場から、思い切り駆け出してしまったのだ
無論、彼女は眠つたままなのだから、俺のことだって知らないだろ？
俺もまた、彼女のことは一切わからぬまま
あの日の出会いは、終わってしまったのである

「なるほどねえ・・・」

“まあ、灰斗だしな”と、瑠輝
おい、それはどういう意味だコラ

「そうだな・・・どんな子だったのか、見た目とか、外見とか、覚
えてるか？」

「ああ、それなら・・・」

覚えている

というよりも、“忘れるはずがない”
あの、黒く長い美しい髪も
あの、赤渕の眼鏡も
鼻のまわり、微かに見えたソバカスも
全部、俺の脳みそに、確実に焼き付いてる
心の中、メモリーカードにセーブ済みだ

そんなわけで、最初の説明、冒頭のお話に戻るわけだ

俺が彼女の特徴を話した瞬間に、驚くほどあっさりと判明してしまつたのである

“何が？”と聞かれれば、勿論“彼女”のことだ

彼女——“瀬川アズハ”について

どうやら、瑠輝は彼女ことを知っていたらしい
もつとも、自分から話したことはないらしいが
それでも彼が知っているくらいに、彼女は有名ということだろうか？

「瀬川、アズハ・・・か」

「変わった名前だろ？
アズハって、カタカナで書くんだぜ？」

「いや・・・綺麗な名前だ」

「・・・マジで、ホレてるみたいだな」

言つて、瑠輝は溜め息

それから懐から、一冊のメモ帳を取り出し、パラパラとページをめ
くり始めた

「なんだよ、ソレ？」

「なにして、そんなの決まつてるだろ？が

俺が幼稚園の頃からつけてる、“灰斗の成長日記”だよ

「なにそれ、初耳なんだけど…？」

「言つてないもん

えつと…。“今日、灰斗に好きな女が出来た。明日できつと、世界は終わってしまうのだろう”つと

“コレド、よし”と、瑠輝は笑顔を浮かべたままメモ帳をしまりやいやいやいや、何が“よし”だよ

全然よくねーんだよ

なんだよ、その日記

なんで、お前が俺の成長を記録してんだよ

そんで、すげえ失礼だな、オイ

「ま、細かい」とはいとして…だ

「おい、コハ

流そうとするな

「いや、マジで今は置いておいてだ
今重要なのは、これからどうするか…だろう。」

「むう…」

確かに

悔しいが、瑠輝の言つておりである

昨日のヘタレつぶりを聞けば、わかるとは思つが
好きになつて、それからどうしたらいいのか
俺には、全くわからないのである

「どうしようつ？」

「どうしようつて……ひとまず、話しかけるといひからじやないか？」

“普通は、そうだと思つが”と、瑠輝

“話しかける”か

言葉で言えれば簡単だが、実際に実行するのは難しいだろうなあ
ていうか昨日、眠った彼女を前にして、あのザマである
起きている彼女相手に、話しかけられる気がしないのだが……

「けど……そもそも、言つてられないよな」

「おーおー、珍しく積極的だな」

「あー、うん」

“まあ”と、苦笑い

確かに、俺には瑠輝以外に友達はいなかつたけど
確かに、俺はあんまり自分から他人に声をかけることはなかつたけど
それでも、そんなことを忘れてしまうくらいに

俺は・・・彼女の声を、聞いてみたかったんだ

「それで、どうしていつなったんだよ」

時間は過ぎて、昼休み

そんな風にボヤキながら見つめるのは、目の前の教室の表札
扉の上には、“一年三組”と書かれていた
先ほども言ったが、此処が瀬川のクラスである
その教室の扉を前に、俺は腕を組み立っていたのである
その隣には、瑠輝が一や二やとしたまま立っていた

「いやいやいや、いきなつすんだろ」

「そんなことはないだろ

よく言ひじやないか、“兵は神速を尊ぶ”って
ともかく、なるだけ早いつちから彼女と接点を持つておきたいだろ
?」

「それは・・・まあ」

確かに、やうなんだけど

まさか今日、しかも昼休みに、彼女との初の“対話”を試みること
になひとつとは

その後

朝の会話のすぐ後、瑠輝は“俺に任せろ”と言ったのだ
それからすぐ、アイツは“ひとまず、話しかけるところからだな”
と計画を練り始める

休み時間では、時間が無さすぎる

ならば、昼休みだーーと、今に至るわけである

因みに・・・

「えっと・・・“始めまして、瀬川さん”からの、“この後、一緒に

にお話でもしない？”

これで、いいのか？」

「いいんじゃないか？』

あんまり、じう・・・恐い顔をしないで、な

「眞つとくはぢ・・・田つきが悪いのは、生まれつきだぞ？」

「知ってるよ

けど、なるべく笑顔でな」

「できたらな

言つて、溜め息を吐き出す

前回・・・メタなことを言つてしまえば、第一話の時点ではまだ言つていなかつたのだが

どうやら、俺の田つきは相当地にじらし

ところが、俺自身もウンザリするほど直覚している

おかげで怒っているわけでもないのに、怒っているものだと勘違いされる始末

小学校の頃ならびともかく、中学になつて背が伸びてからば、ます

ます鋭くなってしまった

多分、というか確実に

俺に友達が出来ない原因に、コレも多分に含まれるのだろう

「はあ・・・」

なんて、何とも嫌なことを思い出しながら

俺は、三組の教室の扉に手をかける

それから・・・

「そんじや、勇気出して行つてくるわ」

「ああ

俺はこつから、見守つてるからよ
なんか困つたら、こつちを見てくれ
助け船を出してやるから」

“あんがと”と、瑠輝に笑い掛けながら

俺はーーーその扉を、勢いよく開いたのだった

瞬間、集まつてくる幾つもの・・・視線

“篠崎君が、このクラスに来たよ”や、“嘘・・・超嬉しいんだけど”など、良く聽こえはしないが

ひそひそと、響く声

思わず“うつ”と声をあげ、教室から出ていきたくなる衝動にかられる

が、なんとか堪える

そのまま、見回した教室の中

“彼女”は、いたのだ

場所で言えば、窓側の一番後ろ・・・教室の一番奥、一番隅っこ
そこに、彼女はいたのだ
他の生徒同様に、驚いたような表情を浮かべ、俺のことを見つめながら

や、ヤバい・・・滅茶苦茶、可愛いじゃねーか、畜生

「つひ、そんな場合じやないだろ？俺」

と、小さく咳き、深呼吸

それから、ゆっくりと歩き出す
やがて・・・俺は、彼女の机のすぐ前に立っていた

「え・・・？」

と、小さく声をあげたのは瀬川である

そんな彼女を前にして、俺はもう緊張のあまり、手汗がヤバかった
どれくらいかつていうと、“ロツクマンXのボス戦の時、壁蹴りを
多用しながら長時間戦つた時くらい”に、手汗がヤバいのである
または、“PCで小説を書いている時、夢中になりすぎて気づいたら手汗がヤバかった時”である
・・・いや、けっして作者のことではないので、あしからず

ともあれ、だ

このままでは、状況は一向に進まない

昼休みだって、限りはあるのだ

そもそも、まだお昼だって食べていない

急がなければ、お昼を食べる時間がなくなってしまう

「よし・・・」

よし、覚悟を決めよう

そうだよ

もっと、楽に考えればいいじゃないか

別に今日、彼女に告白をするわけではないのだ

ただ、“会話”をするだけ

当たり障りのない、そんな会話をするだけだ

そう考えれば、少し冷静になつてきましたぞ

この勢いで、言えばいいんだ

なるべく、笑顔を浮かべながら

彼女に、言えばいいんだよ

“はじめまして”って、そう言えばいいんだ

――よし、言え・・・俺！

「おいアンタ、瀬川だっけか・・・ちょっと、シラ貸せよ

「ひつ・・・!？」

その瞬間、教室が大きくわめいた
い、言えた・・・無事に、彼女に話しかける」とがさ（「）

（< ^ ）アレ？

――って、おい！

びつしてやうなった、俺！――

“はじめまして”が、びつなつたひ、そんな言葉に変換されるんだ
よ――

「あ、あの・・・その・・・」

しかも、瀬川泣きやうじゅねーか
いや、もつせ口に泣いてるじゅねーか

けど瀬川、いめん・・・泣き顔、滅茶苦茶可愛いっす

「・・・つて、やうじゅねーだろー。」

「つー？」

頭を抱え、思わず声をあげてしまつ

瞬間、ビクリと体を震わせる瀬川

ああ、違うんだ

そんなつもりじゃなかつたんだよ

ヤバいよこれ、マジでせば一

話した言葉もだけど、きっと中途半端に浮かべた笑顔も、きっと彼女が怯えてる原因の一つだと思つ

死にたい

激しく死にたい

「つ、そうだ！」

その時、俺は思い出す

こんな時の為に、出入り口には瑠輝が控えてるんじゃないかな
早速、何かアドバイスを・・・

「つて、いねーしー！」

いなかつた

瑠輝は、そこにはいなかつたのである
ジーザス、アイツ逃げやがった
ていうか、ちょっと待て
これ、どーすんだよ！？
この状況、いつたいどうすればいいんだよ！？

「あーーー、くそー！
瀬川、ちょっと来いー！」

「つ、キャッ！？」

咄嗟のことである

とこうよつ、こんな状況の中にいるくらいなら、なんて
そんなことを、思っていたのかもしれない

俺は無意識のうち、「彼女の手をとつて、其の場から早足で歩き
始めていたのである”

そしてそのまま、教室から飛び出していたのだ

話しかけるのに、失敗したくせに

彼女の手を無意識のうちとはいえ、こうして握れたことこの
これまた無意識のうち、「喜んでいる俺が

——此処には、いたのである

／ 続く

第2話 まよは、声をかかないとひかり（後編）

いかがだつたでしょうか？

灰斗くん、暴走中 w

次回は、ようやく彼女が色々話すことになります

そして、彼は・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6171y/>

ハピネスッ～ヲタクな君に、恋してる！～

2011年11月19日20時30分発行